

アーネスト・サトウ『会話篇』にみえる 感動詞の諸相

兪 三 善

論文要旨

アーネスト・サトウの『会話篇』（1873）には感動詞が多く出現している。これらの感動詞は幕末（1862年）に來日したアーネスト・サトウが見聞きして採集した幕末明治初期の江戸語・東京語と考えられる。本稿では『日本国語大辞典 第二版』での用例と比較をして、『会話篇』の感動詞の重要性を検証した。『会話篇』には、①室町時代の謡曲や狂言にあらわれている感動詞も少なからず収録されていること、②上方の作品に使われている感動詞も受け継がれていること、③特に滑稽本と人情本にあらわれている感動詞が多数収録されていること、④明治期の言文一致体を用いる作家の作品の感動詞と一致するものが多いこと、などが確認できた。『会話篇』の感動詞は明治期の早い用例であり、明治以前の口語が現代の口語へとつながっていく様を知ることができる貴重な記録であった。

キーワード【アーネスト・サトウ、会話篇、感動詞、幕末のことば、口語】

1. はじめに

アーネスト・サトウの『会話篇』（1873）が幕末明治初期の江戸語・東京語の資料として大変貴重であることは、吉田（1952：336）¹⁾ や小松（2006：302）²⁾ が指摘しているとおりである。特に幕末期のことばの資料としてよく取り上げられる³⁾。こうした『会話篇』には、引用文⁴⁾ の下線部のような感動詞が多数収録されている。

(1) へい、おや、しょうじまでがこんなにぬれたこと、こりゃ まあ、
しかしよいゆうだちでございます。やあ、いなびかりのひどい
こと。(EX 24-4)

(2) これ、きちすけ、しんめいまえへいってみずひきとのしをかってこ
い。(EX13-24)

(1)と(2)の例文にみられる「へい」「おや」「こりゃ」「まあ」「やあ」「これ」が感動詞で

ある。これらの感動詞は、『日本文法大辞典』(p.146)の「感動詞」において、「驚き・詠嘆などの感情、誘い、呼びかけ、応答などの意志を直接に表現した語」に相当する。詳細な感動詞の定義および感動詞として扱う範囲については本稿の4節で記載する。

このような感動詞が『会話篇』に多くあらわれている。しかしながら、『会話篇』の感動詞についてはこれまでまとまった報告がない。同書の感動詞の重要性をより詳しく調査する必要があると思われる。そこで、『会話篇』の感動詞を、『日本国語大辞典 第二版』(以下、『日国 第二版』と称する)での用例と比較をし、日本語および感動詞の語史における意義を問うことにしたいと思う。その検証は、『会話篇』が明治初期の文献であることに着目し、明治以前と明治以降に分けて行った。その成果の一部を紹介すると、『会話篇』には、①滑稽本・人情本の感動詞が多く含まれていること、②明治期の言文一致体を用いる作家の感動詞と符合することが確認できた。このような『会話篇』にあらわれている感動詞の諸相を解明することは、同書の資料的意義を深めることになろう。それが本稿の目的でもある。

以下、2節で資料について述べた後、3節で『会話篇』を資料とした先行研究をまとめる。4節には感動詞の調査の概要を記す。5節では『会話篇』にあらわれている感動詞の個々の使用実態について述べる。6節では『会話篇』の感動詞の明治以前の諸相について、7節では明治以前から明治期につながる様相を記す。8節では明治以降の諸相を記述する。9節はまとめである。

2. 資料について

今回資料として用いた『会話篇』は、イギリスの外交官・日本学者であるサー・アーネスト・メイソン・サトウ (Sir Ernest Mason Satow) が日本語学習書として、日本人数名の手助けの下に明治6年(1873年)横浜で刊行したものである。

『会話篇』は、和英対訳の対話集 (Part I) と、その対話文の日本語に使われている語句についての注釈集 (Part II) と、Part Iの対話集の日本語についての和文テキスト (Part III) からなる。Part IIIは、『春秋雑誌 会話篇』(全2冊)と題せられ、仮名文(1章から14章まで)および漢字仮名交り文(15章から25章まで)である。また『会話篇』には、フランス語に翻訳された仏訳本(全1冊)もある。

『会話篇』の会話は、品物の売買、師匠と弟子、主人と召使、火事、新年および恵方参りの際の主人と客人、公用私用の旅、訴訟、時候、挨拶といった当時の日常生活で交されたものである。

本稿の調査では、Part IとPart IIは東洋文庫の『会話篇』、Part IIIは『春秋雑誌 会話篇』(『増補 江戸語東京語の研究』所収の全2冊)を用いている。Part I・Part IIとPart IIIとが別の資料となっているのは、東洋文庫のサトウの『会話篇』にはPart IIIの『春秋雑誌』

誌『会話篇』が収録されてなく、一方『春秋雑誌 会話篇』には Part I と Part II が収録されていないためである。

3. 『会話篇』についての先行研究

管見の限りでは、『会話篇』の感動詞のみを詳しく分析した先行研究は確認できなかった。一方で、『会話篇』を用いて、江戸ことばの性格を分析したり、幕末の武士のことばとその規範意識を考察したり、東京語の特色を論じた研究はある。本稿においても『会話篇』にみえる感動詞の語学的価値を究明するとともに、それをもって同書の言語資料としての意義を確認したい。

たとえば小島(1972)は、『会話篇』の江戸ことばと滑稽本や人情本、S・R・ブラウンの『会話日本語』(Colloquial Japanese, or Conversational Sentences and Dialogues in English and Japanese, 1863, Shanghai)やJ・C・ヘホンの『和英語林集成(初版)』にあらわれた江戸ことばを比べて、その性格を明らかにしている。また古田(1974)は、『会話篇』と『夢酔独言』を資料とし、幕末期の下級武士たちのことばとその規範意識について考察して、下級武士たちがふだんは町人と同じ用語で話していても、武士同士で話すとき、あるいは武士である身分を明らかにしようとして話すとき、ことばづかひの違いで表したという。飛田(1977)は、S・R・ブラウンの『会話日本語』とE・M・サトウの『会話篇』における人称代名詞の位相の分析をとおして、ブラウンとサトウが習得しようとした江戸語がどの位相に属するかを考察している。大久保(1988)は、『会話篇』のPart IIからAdjectiveとされた語を抽出して、サトウの考えていた日本語の形容詞について分析をしている。常盤(2001)は、『会話篇』(初刷本)内のローマ字表記にみられる音節「エ」の5種類の表記(e, é, ë, ye, yé)の表記原理について論じている。小松(2006)は、幕末の江戸語の音節融合を、『会話篇』における係助詞ワ、接続助詞バ、終助詞ワと接続語との融合において検証している。兪(2015)は、『会話篇』における「言いさし表現」に着目し、「EXERCISE 別の出現状況」、形式面、機能面、「言いさす内容」について分析をしている。

一方、『会話篇』を調査資料の一部として用いた松村(1990)は、日本人による明治初年の洋学会話書の『英和通信』『英和通語』、西村周次郎・中村順一郎撰『独逸会話集成』初篇(全2冊)、青木輔清撰『英会話独学』、佐藤重親撰『英語学捷径』の五冊に外国人の著作によるサトウの『会話篇』およびS・R・ブラウンの『マスターリーシステムによる日英会話書』を用いてそこに使われている助動詞「です」とその用法を検証している。同様に吉田(1952)は、東京語の特色を述べる際に東京語の文献として『会話篇』をあげて、その解説と第12章時候の挨拶の中の秋の部分を紹介している。黒崎(2011)は、役割語から考える自称詞「わし」の方言性と出現時期を『会話篇』からも確認をしている。

その他、金沢(2008)は、会話篇を中心にサトウの回想録『一外交官の見た明治維新』などの著作や日本語書簡を通して、サトウの日本語学習や日本語研究について検討をしている。桜井(2009～2012)は、サトウの英文で記された『会話篇』のPart II (Notes) に日本語訳ならびに注釈を施したものを発表している。

以上、サトウの『会話篇』についての研究を概観してみた。今までの『会話篇』を用いた研究は、幕末江戸語・東京語の人称代名詞、助動詞、丁寧語について、またその当時の音韻や発音についてのものがほとんどである。そして、『会話篇』そのものの扱いは、幕末江戸語・東京語、また当時の音韻や発音を知る資料の一部として使われていることが多い。このような研究成果によって、『会話篇』が江戸語・東京語の資料として貴重であることは、広く知られるようになった。しかしながら、その研究は決して多くなく、近年の研究もあまり見当たらない。データに基づいた研究や『会話篇』のことばの細部に切り込んだ研究が必要と思われる。本稿では、今日まで注目されずにいたサトウの『会話篇』にみえる感動詞を取り上げ、その諸相を明らかにするとともに、それをもって言語資料としての意義を考えてみたい。ただし、その諸相と言語資料としての意義を考えるのに、比較資料を『日国 第二版』だけに限定していることには問題があろう。しかし、ここでは『会話篇』の感動詞をより深く広く検討していくための一つの手がかりが作れたらと思ひ、問題を広げないようにした。

なお、本稿では感動詞についての先行研究をあまり紹介していないので、稿を改めて感動詞を意味別に分類して扱う際に詳しく紹介したいと思う。

4. 調査の概要

本稿の感動詞は『日本文法大辞典』(p.146)の感動詞の定義に基づき抽出して、『日国 第二版』の品詞の記載に従って感動詞であることを再確認し、金水(1983:131-134)の分類に当てはまるものを対象としている。すなわち、感動詞の認定は『日本文法大辞典』の「感動詞」において、「主語・述語・修飾語・被修飾語という文の成分と関係なく表現される。つまり、他の語と成分上の関係がないので、独立語として扱われることがある。なお、感動詞だけで言い切る場合も多いので、一語で一文をなす性質が濃厚である」という基準に従った。感動詞が独立語ということで、「よ」「かな」「なあ」のような文末に置かれて感動の意を表す間投助詞は除いた。特に独立語として扱われるという規定は、副詞や接続詞や代名詞は一語で一文をなすことがまれである点からして、感動詞でありながら副詞や接続詞や代名詞の振舞いをするものとの区別に有効であった。また独立語は読点「、」で区切ることができるために見分けが付きやすい。事実、サトウも読点で区切っている。さらに『会話篇』Part III(和文)では、感動詞はカタカナで表記しているためわかりやすい。

考察の対象とする感動詞の範囲は、以下の金水(1983:131-134)の第I類から第IV類ま

での分類に属するものであるが、その中の第Ⅰ類の第一種〈あいさつ〉は除いた。

- 第Ⅰ類〔行為担当〕 第一種〈あいさつ〉「こんにちわ」「ごめんなさい」
 第二種〈呪文・まじない〉「アーメン」「ちちんぷいぷい」
 第Ⅱ類〔行為添加〕〈かけ声・はやし声〉「どっこいしょ」「ハアコリヤコリヤ」
 第Ⅲ類〔発始信号〕 第一種〈呼びかけ〉「やあ」「おい」「こら」
 第二種〈起動〉「さあ」「ほら」
 第三種〈持ちかけ〉「ねえ」「なあ」
 第四種〈応答〉「はい」「うん」「ええ」「いいえ」
 第五種〈反応〉「あっ」「ほう」「おっと」
 第Ⅳ類〔遊びことば〕「えーと」「あー、うー」「そのー」

本稿でこの金水の分類を取り入れたのは、この分類が従来の研究に散見される「感情を表わすもの」「呼びかけを表わすもの」「応答を表わすもの」の三分類⁵⁾を細分化し、さらに第Ⅰ類〔行為担当〕と第Ⅳ類〔遊びことば〕を項目として加えているところが一つの理由で、もう一つの理由は第Ⅰ類と第Ⅳ類が『会話篇』にあらわれているとしたら、これらは『会話篇』のことばの多様性や特色を表わすものと考えられるためである。

なお、『日国 第二版』の解説において、副詞でありながらも感動詞的に用いる「なるほど」と「まあ」の一部、「それはそれは」は、本稿で考察の対象外とした。しかしながら、以下の引用文の下線部の「なるほど」のように意味の面において、副詞と感動詞との区別が付きにくい場合もあった。

- (3) なるほど, あさのうちはくさのなかはあるけません, わたくしもさくばんよふけてあるきましてきものをよつゆでぬらしました. そのせい か して こんにち は ころもち が わるう ございます.
 (EX24-55)

Ah, exactly so, one can't walk on the grass in the early morning. I was out walking last night very late, and my clothes got quite wet with the dew. (後略)

例文中の「なるほど」は『日国 第二版』では副詞【一】の②の①の「たしかに、確実に」の意味に近いので紛らわしいものであるが、この「なるほど」はサトウが英訳で「Ah, exactly so.」のように「Ah」を使用しているので、感動詞として認定した。

続いて、『会話篇』Part Iのローマ字表記の感動詞に、仮名対応をする際には『会話篇』Part IIIの表記も参考にした。ただ、松村(1998: 396)が指摘しているようにPart Iにお

けるローマ字表記と、Part III における仮名表記との対応の仕方については様々な問題があるため、本稿の翻字と Part III の表記が一致しない場合は Part III の表記に沿うことはせず、その表記も紹介しながら論を進めたい。ちなみに Part I と Part III における仮名表記の対応が若干異なるものは 11 種類あった。丸括弧で囲んだ表記が Part III のものである。「ふむ [H'm] (ん・んん)」「さようさ [Sayôsa] (さやうさ)」「はあ [Hâ] (ははあ)」「えい [Ei] (ええ)」「あのう [Anô] (あのお)」「え [É] (ええ)」「ええ [Eé] (えええ)」「くわばら [Kuwabara] (くはばら)」「さようさね [Sayôsanê] (さやうさねえ)」「べらぼうめ [Berabômé] (べらぼうめい)」「や (もう) [Ya mô] (やあもう)」である。

最後に、語形および異なり語数の数え方について記す。「これこれ」のように同じ感動詞が 2 回続いている場合、これを畳語とするか繰り返しとするかのことであるが、ローマ字表記が [Koré, Koré] というふうに通じマークで区切られている場合は、畳語とせず「これ」を単体と認め、異なり語数を 2 回とする。通じマークは区切りを意味するからである。ちなみに『会話篇』Part III では、通じマークを使わず繰り返し符号の「く」(くの字点)や「ヽ・ヾ」(一つ点)といったもので畳語としている。

以上のような基準を踏まえながら、『会話篇』から 42 語 (305 回) の感動詞を抽出することができた。抽出した感動詞の実例と個々の出現数は次節で示す。

5. 『会話篇』にあらわれている感動詞の実態

サトウの『会話篇』に使用されている感動詞の全体像が見渡せるように、感動詞と出現数、そして『日国 第二版』から検索した意味とその番号を次の表 1-1、表 1-2、表 1-3 にまとめた。感動詞は出現数が多い順に示す。Part III の表記は先述したためこの表には掲載しない。意味の掲載欄に記した「※」は、『日国 第二版』に見出しの登録がない用例である。意味の掲載は『日国 第二版』の解説どおりではなく簡略化した。なお、意味の認定において整合性をはかるために 5 人の日本人の協力を得たことを記しておきたい⁶⁾。

表 1-1 『会話篇』にあらわれている感動詞の実態

感動詞	出現数	意 味
へい	46	肯定、承諾の気持をあらわす。
これ	22	【二】①人に呼びかけ、注意をひくことば。
いえ	21	②相手のことばに対する否定的な立場を示す時に用いることば。①相手のことばを打ち消す時に発することば。
なるほど	17	【三】相手のことばに対して、その通りであると同意する気持を表わすことば。
おや	16	意外なことに会って、驚いたり不思議に思ったりした時に発することば。

おい	16	②注意をうながす時に発することば。 ③相手に応じて返事をする時のことば。 ④特に同輩、目下などに呼び掛ける時のことば。
はや	13	あきれ、戸惑い、恐縮した際に発することば。
なに	13	【四】①相手の言語・行動や、前の文脈の事柄を否定し、反発する気持を表わすことば。①軽く否定する。
まあ	12	【二】意外性に驚く、また心外として反発する際に発することば。
いや	11	①驚いた時や、嘆息した時に発することば。 ②気がついて思い出した時などに発することば。 ③人に呼びかける時に発することば。

表1-2 『会話篇』にあらわれている感動詞の実態

感動詞	出現数	意 味
さあ	11	①人を誘ったり、促したりする時に発することば。
ふむ	10	①相手の話に軽く応じたり、ぞんざいに、承諾の意を表わす時に発することば。
ああ	8	②驚き、悲しみ、喜び、疑問などを表わすことば。
やあ	8	①驚いたり、あきれたりした時に発することば。
はい	7	①あらたまって応答する時、または、相手のことばに承諾した意を表わす時に用いることば。 ②何か行動に移ろうとする時に、注意を促すことば。
さようさ	7	※
いいえ	6	相手のことばを、ややていねいに打ち消す時のことば。
おお	6	①人に答えて承諾・肯定の意を表わす時のことば。 ③人に呼びかける時に発することば。 ④驚いたり、強く感動したりした時に発することば。
は	6	②応答のことば。かしこまる時に用いることば。 ③驚き、喜び、当惑を表わすことば。
いや(否)	5	【一】①相手のことばを打ち消すことば。
はあ	5	②かしこまって応答する時に用いることば。 ③驚き、喜び、当惑を表わすことば。
なんと	4	【二】相手の同意を期待しつつ呼びかけることば。
もし	4	【一】相手に呼びかける時のことば。
やれ	4	②驚いた時、あきれた時などに思わず発することば
よし	4	承知や承認、また決意、命令などの意味を表わして、相手に応じて発することば。

表1-3 『会話篇』にあらわれている感動詞の実態

感動詞	出現数	意 味
なんだ	2	【二】①相手の言語・行動をとがめ、またはそれに反発することば。 ②予想外の事態に対して、驚きを表わすことば。
えい	2	③力を入れようとする時、決断する時などに発することば。 ⑤強く感動した時や驚いた時に発することば。
いかさま	2	【三】相手の意見を肯定して感動的に応答することば。
あれ	2	意外なことが起こって驚いた時や、不審に思う時などに発することば。
おい	2	遠くにいる人に向かって、大きな声で呼びかける。また応答する時のことば。
くわばら	2	①落雷を防ぐという呪文
あのう	1	次の言葉へのつなぎとして、言葉の初めや中間にはさむことば。
いんえ	1	相手の意見に対して、否定の意を表わすことば。
え	1	②意外なことに驚いたり、聞き返したりする時にいうことば。
ええ	1	④次のことばがすぐ出ない時、言いにくくてためらう時などに発することば。
こりゃ	1	②不意の出来事に驚いた時に発することば。
さようさね	1	※
べらぼうめ	1	※
そら	1	それをさし示して、相手に注意を促す時のことば。
それ	1	【三】相手に指示し、注意を促す時に発することば。
へええ	1	※
や	1	①驚きや困惑に思わず発することば。

上の表の内訳をとおして『会話篇』に使用されている感動詞の使用実態を掴むことができたと思われる。これからはその使用において目立った現象を以下に示す。

まず目立った現象として、一つ目は、『会話篇』にあらわれている感動詞の使用に傾向がある。それは、表1-1と表1-2の「へい」「これ」「いえ」「なるほど」「おい」「おや」「はや」「なに」「まあ」「いや」「さあ」「ふむ」の使用が多いことである。これらの使用数を合わせると208回である。『会話篇』の全使用数が305回なので約70%を占める。『会話篇』のある側面を写しているものと考えられて興味深い。

二つ目は、表1-1の応答詞の「へい」の使用である。46回もある。私たちになじみ深い応答詞の「はい」は7回しかない。「へい」の使用数が「はい」の6倍以上もある。「へい」が「はい」に逆転される時期も気になる。

三つ目は、相手に注意を促したり呼びかけたりするときに用いる表1-1の「これ」と「おい」の使用である。「これ」は22回、「おい」は16回であり、両方を合わせると38回である。少し強引な比較ではあるが、これらの38回という数字と上記の「へい」の46回という数字

を対比させると、「これ」「おい」と言われたら「へい」「へい」と反応する『会話篇』の人々のやり取りが見えてくるように思われる。登場人物たちの関係性が伺える感動詞である。

四つ目は、表1-1の相手のことばに対して否定的な立場を示す「いえ」の使用である。21回も使われている。一方、「いいえ」の使用は6回である。「いえ」の使用数が「いいえ」のその3倍以上も見られる。やや丁寧さにかけていることばが幅を利かせている。その上、同一内容を表す「いや」や「いんえ」も使われており、言い方が多様である。

さて、このような『会話篇』における感動詞の収録に特徴がみえるわけであるが、今回の本稿が目指すところは、『会話篇』にあらわれている感動詞の重要性を解明することであり、感動詞の使い分けをはじめとする諸事項については別稿で詳しく検証したいと思っている。

それでは、本稿が目指すところに立ちかえて『会話篇』に使われている感動詞の細部に切り込んでいきたいと思う。感動詞の諸相は、『会話篇』が明治期の資料であることに着目し、明治以前と明治以降とに分けて分析する。

6. 明治以前に着目した場合の『会話篇』の感動詞の諸相

『日国 第二版』における明治以前の『会話篇』の感動詞の使用実態は、次の表2-1と表2-2の内訳のとおりである。表の意味のところの空白は単一の意味で番号が振られていないためである。なお、これから使う『日国 第二版』の文献例の刊行年、たとえば『源氏物語』(1001?14頃)の場合、刊行年に「?」が入っているが読みやすくするために「-」に改める。

先述のごとく『会話篇』は幕末明治初期の江戸語・東京語の資料として大変貴重で、特に幕末期のことばの資料としての評価が高い。このような『会話篇』に対する評価を念頭に置くと、本調査の結果からこれまで指摘されなかった『会話篇』の感動詞の興味深い側面が見えてくる。

まず『日国 第二版』の明治以前の感動詞の使用例は、鎌倉・室町時代から江戸後期まで見受けられる。鎌倉・室町時代の使用例が8語、江戸初期が6語、江戸中期が7語、江戸後期が22語見られた。

表2-1 『日国 第二版』の明治以前の使用状況

時代区分	会話篇の感動詞	意味	明治以前の最後の文献例
鎌倉・室町時代 (8語)	1	よし	物語・平家物語 (13C前)
	2	えい	謡曲・檀風 (1465頃)
	3	おお	謡曲・安宅 (1516頃)
	4	いや	謡曲・舟弁慶 (1516頃)
	5	や	狂言・真奪 (室町末-近世初)

鎌倉・室町時代 (8 語)	6	いや (否)	①	狂言・入間川 (室町末 - 近世初)
	7	は	②	狂言・文荷 (室町末 - 近世初)
	8	はあ	②	狂言・文荷 (室町末 - 近世初)
江戸初期 (6 語)	9	えい	⑤	日葡辞書 (1603-04)
	10	いや	①	仮名草子・恨の介 (1609-17 頃)
	11	やれ	②	咄本・醒睡笑 (1628)
	12	はあ	③	狂言記・鈍根草 (1660)
	13	は	③	浄瑠璃・凱陣八島 (1685 頃)
	14	くわばら	①	浮世草子・好色旅日記 (1687)
江戸中期 (7 語)	15	おお	①	辞書・物類称呼 (1775)
	16	やあ	①	浄瑠璃・狭夜衣鴛鴦剣翅 (1739)
	17	さあ	①	歌舞伎・毛抜 (1742)
	18	それ	【三】	歌舞伎・幼稚子敵討 (1753)
	19	いんえ		咄本・稚獅子 (1774)
	20	なんと	【二】	咄本・春袋 (1777)
	21	なに	【四】 ①④	洒落本・道中粋語録 (1779-80 頃)

表 2-2 『日国 第二版』の明治以前の使用状況

時代区分	会話篇の感動詞	意 味	明治以前の最後の文献例	
江戸後期 (22 語)	22	ああ	②	漢詩・六如庵詩鈔 - 二編 (1797)
	23	おい	③	読本・椿説弓張月 (1807-11)
	24	なるほど	【三】	雑俳・柳多留 - 一四四 (1836)
	25	はい	①	心学・松翁道話 (1814-46)
	26	なんと	【二】	心学・鳩翁道話 (1834)
	27	いかさま	【三】	滑稽本・東海道中膝栗毛 (1802-09)
	28	なんだ	【二】 ①	滑稽本・東海道中膝栗毛 (1802-09)
	29	いや	③	滑稽本・東海道中膝栗毛 - 発端 (1814)
	30	いいえ		滑稽本・浮世風呂 (1809-13)
	31	おお	④	滑稽本・浮世風呂 (1809-13)
	32	ふむ	①	滑稽本・浮世風呂 (1809-13)
	33	これ	【二】 ①	滑稽本・浮世風呂 (1809-13)
	34	あれ		滑稽本・浮世床 (1813-23)
	35	ええ	④	滑稽本・浮世床 (1813-23)
36	へい		滑稽本・浮世床 (1813-23)	

江戸後期 (22 語)	37	はや		滑稽本・八笑人 (1820-49)
	38	おい	④	滑稽本・八笑人 (1820-49)
	39	はい	②	人情本・春色梅児誉美 (1832-33)
	40	もし	【一】	人情本・春色梅児誉美 (1832-33)
	41	あのう		人情本・春色梅児誉美 (1832-33)
	42	おや		人情本・春色梅児誉美 (1832-34)
	43	おおい		歌舞伎・小袖曾我薊色縫 (1859)

そして、感動詞の使用においては、以下のような興味深い点が見られた。

第一に、『会話篇』には鎌倉・室町時代の謡曲や狂言にあらわれている感動詞も少なからず収録されている。表2-1の1番の「よし」から、「えい」「おお」「いや」「や」「いや(否)」「は」「はあ」までの感動詞が物語・謡曲・狂言に用いられている用例であり、これらの感動詞が『会話篇』に受け継がれているのである。おおよそ400年前の感動詞が『会話篇』に8語も存在することは驚きである。

第二に、『会話篇』には上方の文献にあらわれている感動詞も収録されている。表2-1の10番の仮名草子の『恨の介』(1609-17頃)から、咄本の『醒睡笑』(1628)、狂言記の『鈍根草』(1660)、浄瑠璃の『凱陣八島』(1685頃)、浮世草子の『好色旅日記』(1687)、浄瑠璃の『狭夜衣鴛鴦剣翹』(1739)、歌舞伎の『毛拔』(1742)、歌舞伎の『幼稚子敵討』(1753)までの文献例は上方のものである。また、仮名草子・浄瑠璃・歌舞伎などに用いられた感動詞が合わせて8語も『会話篇』に入っている。

第三に、『会話篇』には江戸後期の感動詞が多く反映されており、具体的には22語も受け継がれている。そして、全体の半数を占める数であるが、『日国 第二版』の江戸後期の使用例として挙げている用例の中には幕末期(1853～)⁷⁾に入る用例が無いに等しい。歌舞伎の『小袖曾我薊色縫』から引かれた「おおい」の1例だけで、幕末期に入って使用例が減少する傾向がある。試みに、江戸末期の人情本の『春色恋廻染分解』にあらわれている感動詞をその総索引⁸⁾で調べると、102語(536回)が確認できた。同時期の『春色玉襷』や『春色江戸紫』といった人情本にも感動詞があらわれている可能性も考慮すると、この『日国 第二版』にみられる幕末期の使用例の減少は、もしかすると、口語が主体の資料が手薄といったこの辞典の資料的制約が要因となっているかもしれないが、これは今後の調査課題としたい。

第四に、『会話篇』には特に滑稽本と人情本に使用されていた感動詞が多くある。双方を合わせると16語である。特に滑稽本からの感動詞が目立つ。そして、滑稽本の感動詞は、『東海道中膝栗毛』『浮世風呂』『浮世床』『八笑人』によるものである。これらの中で『浮世風呂』からの感動詞がトップである。一方、人情本からの感動詞は『春色梅児誉美』に使われたも

のであり、『会話篇』から抽出した感動詞が42語なので滑稽本・人情本と一致する感動詞の占める割合が高いといえる。このことは、『会話篇』における滑稽本と人情本の影響をはかる手がかりとなりそうで、「洒落本・滑稽本・人情本など、いずれも主として町人ことばを伝えるものである」(松村 1974: [2])ということから考えると、『会話篇』に備わっている町人ことばの資料性を喚起しているように思われる。従来の『会話篇』についての研究が武家言葉資料としての側面の解明に重点が置かれていただけに、町人ことばの資料性を喚起させる感動詞は注目に値する。

第五に、『会話篇』にはいろいろなジャンルの感動詞が入っている。次の表3の内訳のとおり、滑稽本・人情本をはじめとして16種類のジャンルの作品に用いられた感動詞が『会話篇』に含まれている。表3は、上の表2-1と表2-2に示した文献例を抜粋して作ったものである。

表3 『日国 第二版』の明治以前の感動詞の文献例と使用例数

滑稽本	人情本	狂言	謡曲	歌舞伎	咄本	浄瑠璃	仮名・浮世草子
12	4	4	3	3	2	2	2
心学	洒落本	辞書	読本	雑俳	漢詩	狂言記	物語
2	2	2	1	1	1	1	1

これらのジャンルの作品は主として俗文体や雅俗折衷文体および口語文体を用いており⁹⁾、その意味で『会話篇』の感動詞にはこれらの文体を代表するものが一同に集まっています興味深い。サトウが『鳩翁道話』に接していることを回想録『一外交官の見た明治維新(上巻)』(岩波文庫、坂田精一訳: 68)に記していることや、また来日当初に「私は英和会話辞書¹⁰⁾の編纂と、日本語の小説を読むことで、多くの時間をすごしていた」(下巻: 228)とあることから、これらのジャンルの作品に目を通していたのではないかと想像されるからである。そして、これらの文体を用いる作品と感動詞が結びつきやすい理由は、森田(1991: 180-181)の言う「頹廢美や滑稽を主とする、庶民感情のむき出しにされた知的低レベルの文学、地の文よりは平俗な会話を重視した戯作や、あるいは会話がそのまま語りと化している浄瑠璃、せりふから成る歌舞伎脚本など、これら口語文学こそ近世における感動詞の無限の宝庫と言ってよいであろう」という解説から知ることができる。このような『会話篇』の感動詞の背景からみると、同書のことばにはさまざまな要素が混在しているように思われる。『会話篇』の感動詞に滑稽本・人情本からの感動詞が多いこともさることながら、それら以外の資料からの感動詞が合わせて27語も収録されていることに目を向けたいものである。先行研究が『会話篇』のことばと滑稽本・人情本のことばとを対比させて幕末明治期の江戸語・東京語の特徴を解明したものが大部分だからである。

以上、明治以前の『日国 第二版』における『会話篇』の感動詞の使用実態を検証した。次節では、明治以前から明治期につながる『会話篇』の感動詞の様相を検討したい。

7. 明治以前から明治期につながる『会話篇』の感動詞の様相

さて、『会話篇』の感動詞の明治以前から明治期につながる様相を調査した。その結果、次の表4の内訳とおり、明治以前の口語が現代の口語へとつながっていく様を知ることができる貴重な記録である、ということが明らかになった。

表4 明治以前から明治期につながる『会話篇』の感動詞の様相

会話篇の感動詞	意味	明治以前	会話篇	明治以降
いや(否)	①	入間川	⇔	怪談牡丹燈籠
はい	①	松翁道話	⇔	怪談牡丹燈籠
いんえ		稚獅子	⇔	当世書生気質
おい	④	八笑人	⇔	当世書生気質
よし		平家物語	⇔	浮雲
はあ	②	文荷	⇔	浮雲
それ	【三】	幼稚子敵討	⇔	浮雲
いいえ		浮世風呂	⇔	浮雲
あのう		春色梅児誉美	⇔	浮雲
おや		春色梅児誉美	⇔	浮雲
えい	③	檀風	⇔	倫敦塔
なに	【四】①⑦	道中粹語録	⇔	三四郎
ええ	④	浮世床	⇔	吾輩は猫である
おおい		小袖曾我薊色縫	⇔	吾輩は猫である
まあ	【二】	春色梅児誉美	⇔	吾輩は猫である
ああ	②	六如庵詩鈔	⇔	多情多恨
おお	①	物類称呼	⇔	多情多恨
なるほど	【三】	柳多留	⇔	多情多恨
これ	【二】①	浮世風呂	⇔	夜明け前
ふむ	①	浮世風呂	⇔	破戒

感動詞を媒介としてつながる様相を、『会話篇』と共通の感動詞が2語以上『日国 第二版』の文献例に採られている作家の作品で示した。その作家は三遊亭円朝、坪内逍遙、二葉亭四迷、夏目漱石、尾崎紅葉、島崎藤村である。作家順に作品を配置している。

時間軸に着目して明治以前の口語が東京語へ向かっていく様相をみると、まず三遊亭円朝においては『会話篇』の「いや(否)」と「はい」によって江戸の狂言と心学が『怪談牡丹燈籠』に、坪内逍遥においては『会話篇』の「いんえ」と「おい」によって江戸の咄本と滑稽本の感動詞が『当世書生氣質』に、二葉亭四迷においては『会話篇』の「よし」「はあ」「それ」「いいえ」「あのう」「おや」によって物語、歌舞伎・滑稽本・人情本の感動詞が『浮雲』につながる。続いて、夏目漱石においては『会話篇』の「えい」「なに」「ええ」「おおい」「まあ」によって狂言や洒落本、滑稽本、歌舞伎の感動詞が『倫敦塔』『三四郎』『吾輩は猫である』に、また尾崎紅葉においては『会話篇』の「ああ」「おお」「なるほど」によって漢詩集と雑排などの感動詞が『多情多恨』につながる。最後に、島崎藤村においては「これ」「ふむ」によって滑稽本の感動詞が『夜明け前』と『破戒』につながっていく。

このように『会話篇』を挟んで主に明治以前の狂言、咄本、歌舞伎、滑稽本、人情本などにあらわれる感動詞が、明治期の文豪たちにつながっていることが確認できる。これが日本語および感動詞における『会話篇』が果たしている役割である。ただ、つながっているということには、『会話篇』がその間の時期の資料だからつながるのは当たり前ではないかという疑問を持たれる可能性があるが、明治以前のどの作品のどの部分が『会話篇』の何によって、現代のどの作家や作品につながっているのかということになると、話は違ってくる。そう簡単には答えられないのもまた事実であろう。それを具体的に示した研究も『会話篇』とそれ以降の資料とを比較した研究もあまり見当たらない。本章ではそのつながっている様相をデータとして示すことができた。

8. 明治以降に着目した場合の『会話篇』の感動詞の諸相

明治以降の使用例は次の表5の内訳のとおり、明治初期から中期まで見受けられる。明治初期が3語、明治初期以降から中期以前までの使用数が17語、明治中期が8語である。これらの感動詞の使用においては、以下のような興味深い点が見られた。

第一に、『会話篇』(1873)の感動詞はすべてが明治初期に使用されているものである。たとえば、表5の4番の三遊亭円朝の『怪談牡丹燈籠』(1884)から28番の小栗風葉の『青春』(1905-06)までの文献例が明治初期以降のものだからである。さらに1番の仮名垣魯文の『安愚楽鍋』(1871-72)から3番の『和英語林集成 再版』(1872)までの3語を除けば『会話篇』の感動詞は明治期のもっとも早い使用例である。本稿の調査結果は、感動詞についてのものではあるが、吉田(1952:336)の「先づ明治初期の東京語の面影を知るためには、英人アーネスト・サトウ氏(Ernest Satow)の著した「会話篇」(Kuaiwa Hen, twentyfive exercises in the Yedo colloquial, for the use of students. 明治六年版)の如き書によるべきであらう」という評価に沿うものである。

表5 『日国 第二版』の明治以降の使用実態

時代区分	会話篇の感動詞	意味	『日国 第二版』の文献例
明治初期 (3語)	1	いえ	②④ 安愚楽鍋 (1871-72)
	2	え	② 安愚楽鍋 (1871-72)
	3	こりゃ	② 和英語林集成 (再版) (1872)
明治初期以降 (17語)	4	いや (否)	① 怪談牡丹燈籠 (1884)
	5	はい	① 怪談牡丹燈籠 (1884)
	6	いんえ	当世書生気質 (1885-86)
	7	おい	④ 当世書生気質 (1885-86)
	8	はあ	② 浮雲 (1887-89)
	9	それ	【三】 浮雲 (1887-89)
	10	いいえ	浮雲 (1887-89)
	11	あのう	浮雲 (1887-89)
	12	おや	浮雲 (1887-89)
	13	よし	浮雲 (1887-89)
	14	さあ	① 尋常小学読本 (1887)
	15	おお	① 多情多恨 (1896)
	16	ああ	② 多情多恨 (1896)
	17	なるほど	【三】 多情多恨 (1896)
	18	はや	落語・初夢 (1892)
	19	あれ	小公子 (1890-92)
	20	へい	筆まかせ (1884-92)
明治中期 (8語)	21	えい	③ 倫敦塔 (1905)
	22	ええ	④ 吾輩は猫である (1905-06)
	23	おおい	吾輩は猫である (1905-06)
	24	まあ	【二】 吾輩は猫である (1905-06)
	25	なに	【四】 ①④ 三四郎 (1908)
	26	ふむ	破戒 (1906)
	27	これ	【二】 ① 夜明け前 (1932-35)
	28	は	② 青春 (1905-06)

第二に、『会話篇』の感動詞の多くが明治期の言文一致体を用いる作家の感動詞と符合する。4番の「いや (否)」から28番の「は」までがその感動詞である。『会話篇』と共通の感動詞が2語以上『日国 第二版』の使用例にあげられている作家は、三遊亭円朝、坪内逍遙、二葉亭四迷、夏目漱石、尾崎紅葉、島崎藤村である。明治期の言文一致体を用いる代表的な

作家たちであり、その作品は『怪談牡丹燈籠』『当世書生氣質』『浮雲』『吾輩は猫である』『多情多恨』『破戒』である。

第三に、『日国 第二版』であげている近代文学の作家の中では、『会話篇』と共通の感動詞が多い作家は二葉亭四迷と夏目漱石である。二葉亭四迷の『浮雲』には6語も一致するものがあり、「はあ」「それ」「いいえ」「あいう」「おや」「よし」がそれである。夏目漱石の一連の作品には5語の共通語がある。「えい」「ええ」「おおい」「まあ」「なに」の5語がそれである。彼の一連の作品の感動詞は『吾輩は猫である』に3語、『倫敦塔』に1語、『三四郎』に1語がある。感動詞の使用数においての両者の差は1語だけであるが、作品数からみると、二葉亭四迷は『浮雲』の一作品に6語も『会話篇』と共通の感動詞が見られるのに対して、夏目漱石は三つの作品の使用数を合わせた5語が共通するので、四迷の感動詞の使用が目を引き。ただし、このように作家の感動詞の使用数に着目した場合は、その作家の作品数の多寡によって使用数の差が発生するので、『会話篇』と二葉亭四迷と夏目漱石との一致が多いことは、『日国 第二版』において、夏目漱石の作品の採用が多かったり、他の口語体を用いる作家の作品が少なかったりといった資料的制約によるものと言えなくもない。また、感動詞が上記の6節の「第五」で述べたような作品の内容や文体、さらには作家の個性に左右されやすいことも要因のように思われる。たとえば、二葉亭四迷の場合は他の作品からのものではなく『浮雲』の感動詞だけであり、夏目漱石の場合も『吾輩は猫である』『倫敦塔』『三四郎』の3作品のうち、『吾輩は猫である』が多い。同じ作家の作品であっても作品の内容によって感動詞の使用数が異なるのである。もちろん、これだけではどちらが要因と断定することができないので、『太陽コーパス 雑誌『太陽』日本語データベース』（国立国語研究所編、2005）などを使った調査も今後必要である。

以上、明治以降において『日国 第二版』における『会話篇』の感動詞の使用実態について記述した。

9. おわりに

以上、本稿では『日本国語大辞典 第二版』での用例と比較をして、『会話篇』の感動詞の重要性を検証した。その結果をもう一度まとめる。

(1) 『会話篇』にあらわれている個々の感動詞の使用は、「へい」「これ」「いえ」「なるほど」「おい」「おや」「はや」「なに」「まあ」「いや」「さあ」「ふむ」が多用されている。これらの使用数を合わせると208回であり、『会話篇』の全使用数が305回であるため、約70%を占めるとということが判明した。

(2) 明治以前に着目した調査では、『会話篇』には、①室町時代の謡曲や狂言にあらわれている感動詞も少なからず収録されていること、②上方の作品に使われている感動詞も受け

継がれていること、③特に滑稽本と人情本にあらわれている感動詞が多く収録されていること、④様々なジャンルの感動詞が多様に収録されていることが明らかになった。

(3) 明治以前から明治期につながる様相の調査では、『会話篇』の感動詞が明治以前の口語を現代の口語へつなげていく様相をデータとして示すことができた。この様相は『会話篇』の資料的意義を表わすものであるといえる。

(4) 明治以降に着目した調査からは、『会話篇』の感動詞は、①明治初期に使用されているものであること、特に明治期のもっとも早い用例であること、②明治期の言文一致体を用いる作家の感動詞と符合すること、『日国 第二版』であげている近代文学の作家の中では、二葉亭四迷と夏目漱石の作品の感動詞と一致するものが目立つという成果が得られた。

『会話篇』の感動詞の諸相の解明において、今後の調査課題がある。そのひとつが幕末から明治初期までの『日国 第二版』の使用例が減少する点である。そして、『会話篇』と共通の感動詞が二葉亭四迷と夏目漱石に多いことである。これらの傾向が『会話篇』の感動詞だけにみられるものなのか否かということを考察および調査する必要がある。

注

- 1) アーネスト・サトウの『会話篇』(1873)について、吉田(1952:336)は「先づ明治初期の東京語の面影を知るためには、英人アーネスト・サトー氏(Ernest Satow)の著した「会話篇」(Kuaiwa Hen, twentyfive exercises in the Yedo colloquial, for the use of students. 明治六年版)の如き書によるべきであらう」と述べている。
- 2) 小松(2006:302)は「会話篇が幕末江戸語の資料として優れていることは、今更ここで云々するまでもないだろう。特に武家言葉資料として、抜群の高い資料性を備えている」と指摘している。
- 3) 松村明(1970)「欧米人による江戸語の発音研究」(『洋学資料と近代日本語の研究』東京堂)、古田東朔(1974)「幕末期の武士のことば」(『国語と国文学』51巻1号)、小松寿雄(2006)「会話篇に見る幕末の江戸語一音節融合を中心に一」(『近代語研究』第13集)などを参照のこと。
- 4) 本稿の引用文の原文はローマ字表記であるが平仮名で翻字をしている。すべての平仮名は現代仮名遣いである。日本語の引用文中の下線は稿者が付したものである。右の数字(EX 24-4)は例文の所在(EXERCISE 24編4番)を表す。
- 5) 従来の感動詞の分類については、石神照雄(1981)「感動詞について」(『信州大学教養部紀要 第一部、人文科学』15:1-11)、鈴木一彦(1991)「感動詞とは何か」(『品詞別日本文法講座 接続詞・感動詞』明治書院:138-175)、松岡洸司(1997)「感動詞における研究史と位置づけ」(『上智大学国文学科紀要』14:31-50)などを参照のこと。
- 6) 5人の日本人協力者は筆者の社会人クラス韓国語講座の受講者や知人である。中には外国人にボランティアで日本語を教えている方、日英翻訳に携わる方、高校の教師を務めた方などがおり、韓国語学習も含めてことばについて調べる機会がある方々である。
- 7) 幕末の期間に関する厳密な定義はないようであるが、『広辞苑 第六版』(p.2239)の「江戸幕府の末期。普通、一八五三年(嘉永六年)ペリー来航後をいう」という解説に従った。
- 8) 『春色恋廻染分解 翻刻と総索引』浅川哲也編、おうふう、2012
- 9) 佐藤喜代治(1966)『日本文章史の研究』(明治書院)、飛田良文編(2007)『日本語学研究字典』

の佐藤喜代治らの「文章史・文体詞」(477-503)などを参照のこと。

- 10) この辞書名を、『一外交官の見た明治維新(下巻)』(岩波文庫、坂田精一訳)の付録では『英日口語辞書』(An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language. With M. Ishibashi. Published in Yokohama in 1876.)と記しているが、名著普及会発行による書名は『英和口語辞典』となっている。

調査資料

- 『会話篇』(Part I・II) 東洋文庫、1967
『春秋雑誌 会話篇』(全2冊)、『増補 江戸語東京語の研究』に所収)：423-522
『日本国語大辞典 第二版』小学館、2000～2002(全13巻)
『春色恋廻染分解 翻刻と総索引』浅川哲也編、おうふう、2012

引用・参考文献

- 石神照雄(1981)「感動詞について」『信州大学教養部紀要 第一部、人文科学』15：1-11
大久保恵子(1988)「明治初年における Adjective 考—E.サトウ『会話篇』を中心として—」『お茶の水女子大学日本文化研究年報』12：119-132
金沢朱美(2008)「アーネスト・サトウと日本語研究—『会話篇』を中心に—」『目白大学人文学研究』4：171-181
金水敏(1983)「感動詞」『研究資料日本古典文学』(第十二巻 文法 付辞書) 明治書院：131-134
黒崎佐仁子(2011)「役割語から考える自称詞『わし』の方言性と出現時期」『聖学院大学論叢』23(2)：1-4
小島俊夫(1972)「会話篇(E. Satow)にあらわれた江戸ことば」『国語国文』41(5)：41-53
小松寿雄(2006)「会話篇に見る幕末の江戸語—音節融合を中心に—」『近代語研究』13：301-315
桜井豪人(2009)「アーネスト・サトウ『会話篇』Part II 訳注稿(1)」『人文コミュニケーション学 科論集』7：1-20 茨城大学
桜井豪人(2010-03)「アーネスト・サトウ『会話篇』Part II 訳注稿(2)」『人文コミュニケーション 学科論集』8：1-18 茨城大学
桜井豪人(2010-09)「アーネスト・サトウ『会話篇』Part II 訳注稿(3)」『人文コミュニケーション 学科論集』9：153-171 茨城大学
桜井豪人(2011-03)「アーネスト・サトウ『会話篇』Part II 訳注稿(4)」『人文コミュニケーション 学科論集』10：145-165 茨城大学
桜井豪人(2011-09)「アーネスト・サトウ『会話篇』Part II 訳注稿(5)」『人文コミュニケーション 学科論集』11：125-146 茨城大学
桜井豪人(2012-03)「アーネスト・サトウ『会話篇』Part II 訳注稿(6)」『人文コミュニケーション 学科論集』12：187-200 茨城大学
佐藤喜代治(1966)『日本文学史の研究』明治書院
鈴木一彦(1991)「感動詞とは何か」『品詞別日本文法講座 接続詞・感動詞』明治書院：138-175
鈴木一彦(1991)「古今感動詞一覧」『品詞別日本文法講座 接続詞・感動詞』明治書院：254-275
常盤智子(2001)「E. M.サトウ著『会話篇』にみられる音節『エ』の表記原理—表記と音韻・音価の関わりをめぐって—」『国語と国文学』78(6)：41-53
飛田良文(1977)「英米人の習得した江戸語の性格」『国語学』108：77-96

- 古田東朔 (1974) 「幕末期の武士のことは」『国語と国文学』51(1) : 1-13
- 松岡洸司 (1997) 「感動詞における研究史と位置づけ」『上智大学国文学科紀要』14 : 31-50
- 松村明 (1970) 「欧米人による江戸語の発音研究」『洋学資料と近代日本語の研究』東京堂 : 426-495
- 松村明 (1974) 「序」『江戸語大辞典』前田勇編、講談社 : 1-4
- 松村明 (1990) 「明治初年の洋学会話書における助動詞『です』とその用法」『近代語研究』8 : 396-455
- 松村明 (1998) 『増補江戸語東京語の研究』東京堂
- 森田良行 (1991) 「感動詞の変遷」『品詞別日本文法講座6 接続詞・感動詞』明治書院 : 178-208
- 森山卓郎 (1996) 「情動的感動詞考」『語文』65 : 52
- 兪三善 (2015) 「アーネスト・サトウ『会話篇』における言いさし表現について」『実践国文学』88 : 左 1-24 (201-224)
- 吉田澄夫 (1952) 「東京語の特色」『近世語と近世文学』東洋館 : 331-342
- 『日本文法大辞典』松村明編、明治書院、1971
- 『江戸語大辞典』前田勇編、講談社、1974
- 『日本古典文学大辞典』岩波書店、1983 ~ 1985 (全6巻)
- 『太陽コーパス 雑誌『太陽』日本語データベース』国立国語研究所編、博文館新社、2005
- 『日本語学研究事典』飛田良文編、明治書院、2007
- 『広辞苑 第六版』新村出編、岩波書店、2008

ENGLISH SUMMARY

Aspects of Interjections as seen in Ernest Satow's *Kuaiwa Hen*

Yu Samson

Interjections appearing in *Kuaiwa Hen* (Conversation) are thought to have been aspects of the language of Edo/Tokyo from the late Tokugawa and the early Meiji periods that were heard and collected by Ernest Satow, who visited Japan at the end of the Tokugawa period (1862). The significance of these interjections, in terms of the Japanese language and their etymological history, has been commented on in the *Nihon Kokugo Daijiten* 2nded. as: It is also worth noting that the interjections in *Kuaiwa Hen* 1. include interjections from *yoruri* (ballad dramas), including *Yōkyoku* (Noh songs) and *Kyogen* (comedies) from the Muromachi period, as well as from *kokkeibon* (comic novels) and *ninjobon* (love stories); and 2. include many examples that match interjections in works by Meiji period authors who wrote in colloquial style. The interjections in *Kuaiwa Hen* are examples from the early Meiji period, and they are the valuable records by which we can recognize the way the spoken language prior to the Meiji period was connected to the modern spoken language.

Key Words: Ernest Satow, "Conversation (*Kuaiwa Hen*)", interjection, Tokugawa Era language, spoken language